

本格爆笑ミステリー

「J」の悲劇

教員生活最後の日の日記

～あなたは笑わずに泣かずにこれが読めますか？～

※注意 アメリカの推理小説作家エラリー・クイーンの「Xの悲劇」、「Yの悲劇」、「Zの悲劇」、また薬師丸ひろ子主演の映画「Wの悲劇」とは何の関係もありません。

本作品はJ（藤本博途）にまつわる本格的ノンフィクション・爆笑ミステリーです。

なお、Jとは藤本博途の愛称です。顔がジャニーズ系なので生徒がつけたものです。

Written by Hiromichi FUJIMOTO.

序章

Jは退職することにした。山口県立防府商工高等学校に転勤してまだ4年と半年だが、音楽の勉強と吹奏楽の指導に専念したいからだ。年度途中ではあるが、定年まで2年と半年を残して33年間と半年の教員生活に別れを告げる決心をした。吹奏楽部の生徒には事前に打ち明けた。吹奏楽部の指導は引き続き行うから心配しないようにと説明した。突然の報告で部員たちは茫然としていた。泣いている部員もおり、明らかにいつもと違う空気が部室に流れていた。年度途中の退職にもかかわらず、K校長は9月30日にミニ離任式を開くことにしてくれた。K校長はJと同じ年齢、同じ教科、同じ体型として有名である。校長とJは「一心同体肥満隊」というグループ名で呼ばれ馬鹿にされて親しまれていた。しかし西京高校では監督として甲子園にも出場したことがある、極めて優秀な野球の指導者でもある。離任式までのカウントダウンが始まった。

『離任式まであと14日...』

そうこうしき 壮行式

吹奏楽部の校内活動に壮行式での演奏というものがある。壮行式とは運動部や文化部が中国大会や全国大会に行くことが決まった時に、全校挙げて応援する行事のことだ。体育館に全校生徒が集まり開催される。校長や生徒会長の激励、キャプテンや部長の抱負が述べられ、最後に応援団が前に出て選手を鼓舞するのだ。その時、吹奏楽部の演奏で、全校生徒が校歌を歌うのである。どの学校も吹奏楽部は体育館2階の卓球場で演奏するのが一般的だ。校歌があるから効果があるのだ。

見上げてごらん

Jは坂本九の「見上げてごらん夜の星を」が大好きだ。正確に言うと杉浦邦弘編曲の「九ちゃんグラフィティ」の最後に入っている「見上げてごらん夜の星を」が大好きだ。編曲がいい。最初は木管アンサンブル、次に金管アンサンブルがテーマを演奏する。そこまで打楽器は全く入っていない。優しい響きが心地よい。サビの部分からだんだん盛り上がり徐々に打楽器も入ってくる。バスドラム、シンバルの咆哮を合図についにドラムセットが強烈な3連符をたたく。ひとしきり興奮が続いて最後は鍵盤楽器（ヴィブラフォン、チャ

イム、グロッケン)と中低音楽器により優しく静かな長い音で終わる。まるで一人の人間の一生を2分30秒で表しているようだ。岩国商業高校時代から定期演奏会のアンコールに必ず入れる。演奏会の最後を締めくくるのにふさわしいのだ。毎年アンコールで演奏するので、部員たちもJがこの曲が好きなことはよく知っていた。

ミッション インポシブル

部長のかのんはある計画をたてた。その計画は前代未聞であり実行不可能な計画だった。部長は副部長たちと計画を練り上げ、部員全員に指令を送った。部員たちはその^{ミッションインポシブル}不可能な指令を遂行しようと奮闘した。

連れ出し～第1楽章～

さえは教科書をおばあちゃんの家で忘れたと騒いでいる。前日おばあちゃんの車に乗せてもらった時に忘れたらしい。あれがないと困るとJに聞こえるように言っている。歩いて取りに帰ると1時間かかるとも言っている。見かねたJが車で行ってやろうかと言うと、さえはうれしそうにお礼を言った。おばあちゃんの家近くのスーパーの駐車場で待つようにJに頼んで、さえは車から降りた。かなり時間がたってから教科書のようなものを手に持ったさえがおばあちゃんを連れて戻ってきた。まさかおばあちゃんが来るとは思っていなかったJは驚いて車から降り、おばあちゃんにあいさつをした。ひとしきり孫娘のことを褒めたり定期演奏会のことを話したりして無駄に時間は過ぎて行った。帰りの車の中でさえが突然塩パンを買いたいと言いだしたので、イオンのパン屋さんへ寄ることになった。塩パンはJの好物だ。体についている脂肪のかなりの部分をこの塩パンが担っている。しかし今は離任式までに5キロ痩せようとダイエット中なのでぐっと我慢してJは買わなかった。ここでも無駄に時間が過ぎて行った。

『離任式まであと1日...』

連れ出し～第2楽章～

いつも無精ひげを生やしているので部員のももこによってひげまるという愛称がつけられた先生がいる。全校生徒からも人気のあるリベラル系の商業科教師だ。ひげまるが突然「今日これから40分ほど付き合ってください。」とJに言った。理由も告げられず戸惑ったJだが、退職間際に後輩教師の頼みを聞かないわけにはいかない。さえと学校に戻ったばかりだったが、ひげまるの運転する車で出かけて、ある喫茶店で2人はコーヒーを飲んだ。無駄に時間が過ぎて行った。Jが連れ出しの理由を聞いてもひげまるは「察してくださいよ。」と言うばかりだ。察しようがないじゃないかとJは思ったが、その時ひげまるから「退職記念です。」と言ってネクタイと爪切りを渡された。ネクタイはピアノ柄、爪切りは音符柄だ。ひげまるとJは岩国商業高校でも同僚だったので気が合っていた。想定外の贈り物にJは深く礼を言った。「実はももこが先生を連れ出すように頼んだんですよ。」突然ひげまるが連れ出しの理由を話し始めた。「吹奏楽部員が今から先生のために何かするんじゃないですか？その準備があるから連れ出してほしかったんですよ、きっと。」明日は離任式だ。その前に部員だけで何かセレモニーでもしてくれるのかと思い、Jはうれしくもあるが申し訳なくも思った。40分が過ぎひげまるはももこの約束を果たし、得意気にJを学校に送り届けた。

監禁

学校に戻ったが特に何かしてくれる様子ではなかった。何もないことにJはむしろほっとした。生徒に余計な気を遣わせるのが申し訳なかったからだ。Jは普段部室に隣接する山口県吹奏楽連盟事務局にいる。もとは物置だった部屋を改装してもらった小さい部屋で窓もない。部屋の出入り口は2か所ある。クラリネットパートの生徒がリードをくださいとやって来た。木管楽器のリードはJがこの部屋で管理しているのだ。さ

らにフルートパートの生徒もやってきた。特に用はないらしい。狭い部屋に10人くらいがひしめき一気に人口密度が上がった。クラリネットパートの生徒はリードを手にしても部屋から出る気配はない。フルートパートの生徒は相変わらずただいだけでおしゃべりしている。まるで10人で2つの出入り口をふさいでいるかのようだ。ふいに時計に目をやると長針がひと回りしていることに気付いた。Jは生徒たちにもう遅いから帰るように促したが帰ろうとしない。Jはただ無駄に時間を過ごしていた。ところが突然潮が引いたように生徒たちはみんな一斉に部屋から出て行った。何か合図でもあったかのように。

LINE

Jはスマホではなくガラケーを愛用している。最近はガラケーでもLINE(ライン)ができる。防府商工吹奏楽部のグループLINEが設定してある。緊急に連絡しなくてはならない時はこれを利用して全部員に伝えるシステムだ。離任式の前夜9時過ぎにこのグループLINEに連絡が入った。部長のかのんからだ。「明日は急遽壮行式が入ったらしいので、朝8時までに部室に集合してください!」と書いてある。すでに数人の生徒が「わかりました。」とか「了解」などの返事を書いている。Jは目を疑った。壮行式って急遽入るものなのか?何部が中国大会に行くんだろうか。なぜ学校にいる間に連絡がなかったのだろうか。Jは戸惑いながらもとりあえず「マジすか?」という返事を送っておいた。

卓球場へ

『カウントダウン終了』 9月30日。ついに退職する日が来た。Jは前日ひげまるからいただいたネクタイを締め、7時40分頃に出勤した。すでに何人かの部員が壮行式の準備で音出しをしていた。Jは本当に壮行式があるのかどうかを確認するために、職員室に行って教務部長のN先生に聞いてみた。N先生は機械科の先生で機械のようにシャキシャキ歩くと働き者だ。そばでS先生がゴソゴソしていた。S先生はJと違って極めて優秀な女性英語科教師だ。N先生は何となく口ごもりながら「ああ、ありますよ。」と小声で言う。「何部ですか?」とJがたずねるとまた口ごもりながら「え〜と、何部だったかな。」とまるで分っていない様子だった。しかし壮行式はあるのだ。教務部長があると言えばあるに決まっている。しばらくすると体育館の2階卓球場の方から吹奏楽部員全員の音出しが聞こえてきた。みんな集まったようだ。職員室のホワイトボードの本日の予定欄には「離任式」とは書いてあるが「壮行式」とは書いていないことにその時Jは気付かなかった。

離任式

先に離任式、その後壮行式を行うとK校長がJに言った。事務長に先導され体育館に向かい、ステージに上がった。5キロ痩せるというダイエットの目標には届かなかったが4キロ痩せた。ただ見た目には全く変化がないのが悲しいところだ。まずK校長から過分な紹介をいただいた。ミニ離任式をしてくれるとは聞いていたが、途中退職なのにこれほど本格的に離任式をしていただけとは思っていなかった。Jは恐縮していた。720人の全校生徒のうち、吹奏楽部員50人は全員2階の卓球場にいる。この後壮行式があるからだ。ステージから、2階の卓球場に部員たちが楽器を持って座っている様子が見えた。教員としての最後の話は、高校時代の友人の死を題材にして「人間に必要なものは思いやり、優しさ、勇気だ。」という内容にした。途中で感極まって目が汗をかいたが、何とか話し終えた。その後生徒会長から贈る言葉をいただき、副会長から花束をいただいた。まず花束をくれた副会長に握手をし、その後生徒会長の方へ近づいて握手を求めたその時だった。

Cの音

突然、卓球場の方からクラリネットとサクソフォンのC（ド）の音が聞こえてきた。とてもやわらかい響き。「え？」と思った1秒後、そのCがA（ラ）に上がった時、Jはすべてを悟った。「あ、あの曲だ...！」Aの音の流れると同時にJの目からは堰を切ったように涙が流れた。世界中のありとあらゆる幸せがその瞬間Jだけに降り注がれた気さえした。どうやって先生方の許可を取ったんだ？いつの間に練習したんだ？木管アンサンブル、金管アンサンブルを経てサビに入る。かつてこれほどやわらかくて優しい「見上げてごらん夜の星を」を聴いたことも演奏したこともない。バスドラム、シンバルの咆哮、そしてドラムセットの強烈な3連符。670人の一般生徒と先生方の前でJはただ涙を拭き続けることしかできなかった。部員たちもみんな泣きながら必死で演奏しているようだった。やがて中低音と鍵盤楽器が優しく、小さく、長く、曲の終わりを演出する。指揮は2年生で唯一の男子であるたくとがしてくれたようだ。なかなかやるじゃないか。これほど人の心に訴えかけられる音楽はそうそうできるものではない。生徒たちだけで演奏してくれた「見上げてごらん夜の星を」によって2分30秒に凝縮されたJの教員人生は、終わりを告げた。教員生活最後の日を締めくくるのにふさわしい、優しくドラマチックな、感動的な演奏だった。全校生徒の拍手の中、Jは退場していった。途中2階にいる吹奏楽部員たちに手を振って感謝した。心の中で「ありがとう」を繰り返しながら。Jは33年と半年の教員人生が本当に幸せだったと実感した。Jの退職は悲劇なんかではなかったのだ。

もちろん、この後壮行式が行われることはなかった。

謎解き

1. さえによる「教科書忘れ事件」は捏造^{ねつぞう}であった。塩パンも特に買う必要はなかった。

Jが学校にいない間に部員たちは一生懸命「見上げてごらん夜の星を」を練習していたのだ。

さえはさらに時間を稼ぐためにおばあちゃんに急遽出演を頼みJと話をさせて時間を作ったのだ。また小学生の妹にJの監視まで頼んでいた。小学校帰りの妹を見つけたさえはJがおばあちゃんと話をする機会を失ってはいけないので、車から降りたり不審な行動をすればすぐ姉に知らせるように言いつけていたのだ。おりこうな妹は姉の言いつけを守り、Jを題材にした似顔絵を描いて遊びながら監視を怠らなかつたのだ。無駄に過ぎた時間はなかつたのだ。

2. ひげまるに呼び出された「ひげまる事件」も引き続き練習をするためだった。その日に部員が何かしてくれるのではないかというのはひげまるの勝手な思い込みだった。ここでも無駄に過ぎた時間はなかつたのだ。
3. 吹奏楽連盟の事務局に10人も詰めかけてやたら時間をつぶした「監禁事件」は、その間に鍵盤楽器や他の打楽器を体育館に運ぶためだった。壮行式は校歌しか演奏しないので鍵盤楽器などを当日運ぶところをJに見られると不審がられるからだ。フルートとクラリネットパートはJがあ部屋から出ないように監視し、その間に他の者で楽器を運んだ。やはり無駄に過ぎた時間はなかつたのだ。
4. 「LINE事件」はかのんによる捏造だった。明日は壮行式があるとJに思わせるためのものだ。壮行式がないと部員が楽器を持って2階の卓球場にいるのはあり得ないからだ。もちろん他の部員はみんな知っていたことだ。知っていてわざと「わかりました。」などと返事を書いていたのだ。
5. 教務部長のN先生が壮行式について口ごもっていた「口ごもり事件」はN先生の芝居が下手だったからだ。Jが壮行式はないのではないかと疑っていることに気付いた部長のかのんが職員室に行ってN先生に、壮行式があることにしてほしいと頼み込んだのだ。英語科のS先生はそれを知りN先生が

うまくやってくれればいいがとハラハラしていたので、彼のそばでコソコソしていたのだ

6. 「先に離任式をやってそのあとで壮行式をする。」と言ったK校長もグルだった。Jはこれを「一心同体肥満隊重い思いやり事件」と呼んでいる。

あとがき

「教師は生徒によってつくられる。」という言葉がある。Jはまさしくそうだった。33年間と半年の間に会った吹奏楽部員たちは、みんな優しくて思いやりがあった。どの学校を離任する時もみんな泣いてくれた。特に今回はただの離任ではなく退職だから、生徒たちの思いも深かったのだろう。劇的な演出はJの一生の思い出となり宝物となった。申し訳ないが会う人みんなに話して自慢している。そんな部員たちと一緒に作り上げた音楽は、必然的に優しくて慈愛に満ちていた。離任式が終わるとS先生がやって来てJに言った。「生徒の演奏はすごく上手で素敵でした。特に音がすごく優しくて私は涙が止まりませんでした。」と。音程が正しいだけ、リズムが正確なだけでは音楽とは言えない。多少音程がずれても、リズムが不安定でも人の心の琴線に触れる演奏こそが音楽ではないか。生徒たちは「Jの指揮で演奏するのが好きです。」とよく言ってくれていた。Jもまた生徒たちの指揮をするのが好きだ。優しい音、清らかな響き、流れるようなレガートと力強いマルカート。合奏中は常に幸福感を感じ、時間を忘れる。アマチュアだからできないところもある。濁った音も出る。しかしJはそれを叱責することはない。生徒ができないのは指揮者のせいだからだ。生徒たちも合奏中に幸福感を感じながら演奏してきただろう。しかしJは間違いなく生徒が感じている以上の幸福感を感じながら指揮している。

だから教師はやめても指揮者はやめられないのだ。

余談

離任式が終わった夜9時過ぎ、Jは自宅で「あと3時間後には無職になるなあ。」と考えながらボーとしていたら玄関の呼び鈴が鳴った。誰だろうと思いながら出てみると、そこにはひげまると同じ商業科教師のG先生がいた。大きな花束を抱えている。退職のお祝いですと彼は言った。G先生はJと同じ年齢で、高校時代には吹奏楽部でユーフォニアムを吹いていたこともあり、Jが最も頼りにしている教師の1人である。ややオタク系ではあるが、コンピューターに関しては右に出る者がいない。文部科学大臣から優秀教員表彰も受けた情報教育のカリスマである。吹奏楽連盟のコンクールやアンサンブルコンテストなどの成績入力プログラムもこのG先生が作成してくれている。彼は防府市から交番などを尋ね回って3時間もかけてようやく家を発見してくれたのだ。学校での生徒に続き、夜は同僚にまで祝っていただき本当に信じられないような1日だった。ここに登場したK校長、ひげまる、N先生、S先生、G先生だけでなく、吹奏楽部員のサプライズ演出を知らながら優しく見守ってくださった多くの先生方にJは深く感謝した。

完